

News Letter

■ 特集記事1

芸術文化環境研究コース：
「フォーラム 舞台芸術環境の未来を考える」

■ 特集記事2

日本演劇研究コース主催・
チェコセンター共催：
講演会「舞台美術に見るチェコ
アヴァンギャルド演劇の世界」
研究会「プラハ国立博物館とチェコ演劇」

■ 特集記事3

章詒和氏特別講演会報告
「梅蘭芳及びその他」
～現代における中国伝統演劇の運命～

■ 活動報告

- 日本演劇研究コース P4
- 芸術文化環境研究コース P5
- 東洋演劇研究コース P6
- 舞踊研究コース P6
- 映像研究コース P6
- 西洋演劇研究コース P6

■ 新刊紹介

- イベントカレンダー P7
- 編集後記 P8

演劇・映像の国際的教育研究拠点



特集記事 ① 報告

芸術文化環境研究コース： 「フォーラム 舞台芸術環境の未来を考える」

2010年5月7日(金) 18:00～21:00 小野記念講堂

2009年秋の政権交代を機に「劇場法(仮称)」の制定が検討されているが、法律のすべての詳細は明らかになっていないものの、日本の舞台芸術環境を根本から変容させる可能性をはらんでいることは確かである。そこで、芸術文化環境研究コースでは、劇場法に関する議論を喚起してきた平田オリザ氏(大阪大学教授、内閣官房参与)を招いて、新政権が目指している文化政策、とりわけ舞台芸術に関わる政策について話を伺うとともに、舞台芸術関係者の幅広い参加のもとに議論するための場として、「舞台芸術環境の未来を考える」と題したフォーラムを開催した。小野記念講堂が満杯となる聴衆を集めたことは、この問題に対する高い関心を物語っていたといえよう。

冒頭の基調講演では、平田オリザ氏から劇場法の概要、及び日本版アーツ・カウンシルの創設を射程にとらえた、日本における公的文化支援の在り方に対する青写真が語られた。そもそも、舞台芸術が上演される劇場は、博物館法や図書館法といった法律を持つ異分野の公共文化施設と異なり、法的な規定を持たない不安定な文化施設である。平田氏は、舞台芸術制作の主体を(劇団の意義を否定することなく)劇団から劇場へと移行させていくことが、舞台芸術を持続的に発展させる上では重要だと訴える。その一つの理由は、劇場法が対象とする「劇場」を規定する要件である芸術監督制度を利用して若手演出家のキャリアパスを整備し、人材育成の制度を確立する点にある。そしてもう一点は、経営の不安定な「劇団」ではなく、より恒久的に運営さ

れる「劇場」へと主体を移行することで、舞台芸術への公的助成が従来より円滑に実施される可能性のメリットを指摘したのである。

また、続いて視点は公共劇場から、日本における芸術文化全般の支援制度へと広がっていった。平田氏は日本芸術文化振興会、国際交流基金、地域創造の3組織が、それぞれの特質を生かしながら日本版アーツ・カウンシルを構成する可能性を示唆した。

続いて、本コース客員講師の伊藤裕夫氏(富山大学教授)、松井憲太郎氏(富士見市民文化会館キラリふじみ館長)から、平田氏のレクチャーに対するコメントが寄せられた。伊藤氏の論点は、現場に寄り添った日本版のアーツ・カウンシルの上部にある国家レベルでの戦略のあり方や、芸術文化への介入の方法といった、より俯瞰的な視点から平田氏の構想を検討することに向けられた。また松井氏は、劇場法という法制度の必要性自体は認めながらも、劇団を中心とした舞台芸術の制作を担う団体が、一人歩きを始めたシステムに抗うことの困難さを喚起し、平田氏に制度や行政と上手く向き合っていく上でのノウハウの提示を求めた。

最後の一時間は、会場への来場者から広く平田氏への質問を募った。平田氏の劇場法の議論に対して、舞台芸術の制作に従事する方、舞台芸術の愛好家、地方行政の職員といった幅広い参加者から、賛否入り混じった意見が出されるなか、平田氏がその一つ一つに誠実に答える様子が印象的だった。もちろん、3時間のフォーラムのなかですべての論点を尽くすこと、劇場法に対する何か一つの答えを導き出すのは困難である。けれども、当日の会場での話題の広がりや交わされた意見の多様さは、むしろ平田氏が劇場法を通じて喚起した日本の芸術文化環境の持つ構造的な問題が、広く参加者の間へと浸透していることが感じ取られるような有意義なフォーラムとなった。

(研究助手 光岡寿郎)



特集記事 ② 日本演劇研究コース主催・チェコセンター共催：

講演会「舞台美術に見るチェコアヴァンギャルド演劇の世界」

2010年4月23日（金）16:30～18:00 早稲田キャンパス26号館地下1階多目的講義室

研究会「プラハ国立博物館とチェコ演劇」

2010年4月25日（日）11:00～12:30 早稲田キャンパス26号館3階301会議室



日本演劇研究コースの主要研究テーマの一つに、「日中欧の舞台構造の比較研究」があり、ヨーロッパではチェコ共和国を対象に、初年度から研究を継続している。これまで2度チェコに調査団を派遣し、2008年度にはチェスキークルムロフ城を復元したパヴェル・スラフコ氏（チェスキークルムロフ城博物館館長）を招き、日欧の舞台構造の比較研究をおこなった。今回はチェコとの比較研究を進めるにあたり、チェコの演劇への理解を深めるため、プラハ国立博物館演劇研究室長ヴラスタ・コウプスカー氏を招聘し、舞台美術や舞台衣装から見るチェコアヴァンギャルド演劇についてご講演いただいた。

プラハ国立博物館には30万枚を越える舞台ポスターのコレクションを始めヨーロッパ有数の演劇コレクションがあり、2010年4月22日より演劇博物館で開催された「現実から想像へ チェコ舞台衣装デッサン展」ではそのコレクションを元に、本邦初公開となるチェコアヴァンギャルド演劇の衣装画展が行われた。コウプスカー氏はその展覧会のメインキュレーターでもある。

23日の講演会「舞台美術に見るチェコアヴァンギャルド演劇の世界」ではチェコにおける演劇のアヴァンギャルドの特質

はどこにあるのか、舞台美術や衣装は劇場空間の中でいかに用いられていたのか、そしてどのような演出が行われていたのか、また1920年代～30年代の演劇の方法は現代芸術にいかなる影響を与えたのかを、プラハ国立博物館蔵の貴重な舞台美術デッサン画を資料にご講演

いただいた。続く25日の研究会「プラハ国立博物館とチェコ演劇」では、プラハ国立博物館の来歴と館蔵資料の紹介に始まり、バロック演劇から20世紀初頭のアヴァンギャルド演劇に至るまでのチェコ演劇史を、舞台衣装デッサン画等を資料に講義された。講演会・研究会ともに講演の後には活発な質疑応答がなされ、日本ではあまり紹介されてこなかったチェコ演劇の多彩な輝きが来聴者を強く引きつけた事を感じさせた。

当初の予定では、コウプスカー氏には4月18日から来日して頂き、三回の連続研究会及び一回の講演会を行って頂く予定であった。しかし、4月14日に起こったアイスランド火山噴火の影響で欧州便は軒並み欠航となった。コウプスカー氏の来日日程を変更せざるを得ない事態に陥り、急遽日程を変更・調整。コウプスカー氏は言うに及ばず、所長のペトル・ホリー氏を始めとしたチェコセンターに全面的な御協力を賜り、また演劇博物館助手の上田洋子氏他、関係者皆様方の御盡力により無事にコウプスカー氏をお迎えして講演会と研究会を開催することができた。再三の日程変更にも関わらず御来場下さった参加者の方々へも併せて、この場を借りて厚く御礼申し上げたい。（研究助手 原田真澄）



特集記事 ③ 章詒和氏特別講演会報告

「梅蘭芳及びその他」～現代における中国伝統演劇の運命～

2010年5月29日(土) 15:00～17:30 早稲田キャンパス14号館102教室

演劇博物館グローバルCOE東洋演劇研究コースは、2009年度末に章詒和著『伶人往事』（邦題『京劇俳優の二十世紀』）を翻訳、出版した。著者の章詒和氏は1942年重慶に生まれ、中国戯曲研究院戯曲文学科を卒業後、四川省川劇院芸術室を経て中国芸術研究院戯曲研究所に勤務している（79～02年）。これら研究者としてのキャリアに加え、57年の反右派闘争の際に右派の筆頭とされた章伯鈞の娘として、文化大革命期に「現行反革命罪」により十年間服役するなど（78年名誉回復）、過酷な半生を過ごしてきた。

こうした経歴を背景として生まれたのが、八人の京劇俳優達の悲運を扱った『伶人往事』という書物であり、そこには二十世紀中国の政治に翻弄された氏自身と京劇俳優達の経験が渾然一体となって表現されている。故事を記す筆鋒は鋭く、また筆頭右派の娘という経歴も相まって、『伶人往事』は大陸では発禁処分を受けているが、一方で章詒和氏の文章に対する評価は極めて高く、また旺盛な批判精神により現時中国の言論界を代表する知識人の一人と目されている。東洋演劇研究コースは今回の出版を機に章詒和氏の招聘を計画、一般聴衆に公開する形でコース主催の特別講演会を開催した。

今回は「梅蘭芳及びその他～現代における中国伝統演劇の運命」というタイトルのもと、『伶人往事』の八人には含まれなかった梅蘭芳の事跡を、従来半ばタブー視されてきた事柄も含めて縦横にお話いただいた。特に俳優として名の売れる以前、酒席に侍る歌郎として景和堂という堂子に属していたこと、新中国成立後まもなく「移歩不換形」という発想を披露したことからの批判にさらされ、以後は上層部のチェックを受けてから発言をするようになったことなど、最新の研究成果に基づきながら通常は明らかにしづらいエピソードを次々と赤裸々に語られた。また副題にある現代中国における伝統演劇に関しても、政府の管理が今日に至るまでどれほど伝統演劇を弱体化させたか、時に現代中国社会に対する痛烈な批判を交えて語られ、中国人を多数含む聴衆からたびたび喝采が送られた。



講演に引き続き、当日の通訳を務めたGCOE研究生の波多野眞矢氏により、俳優座が撮影した梅蘭芳1956年来日時未公開映像の放映と解説が行われた。反右派闘争の始まる一年前の映像であり、新旧中国の境界に位置する貴重な記録であることが確認された。続く第三部として、事業推進担当者の児玉竜一氏および岡崎由美氏との鼎談が行われ、日中双方の俳優や観客のあり方、制度と演劇の関係などについて活発なやり取りがあった。会場とした300人収容の教室は終始多数の聴衆による熱気に溢れ、講演から鼎談まで時間が全く足りない、という意見が出るほど充実した催しとなった。東洋演劇研究コースでは今後も章詒和氏と連絡を取り合い、学術交流を続けていく計画である。

（事業推進担当者 平林宣和）



日本演劇研究コース:

■第24回 人形浄瑠璃文楽研究チーム研究会

日本演劇研究コースの人形浄瑠璃文楽研究チームが開催している研究会が2010年3月23日(火)に開催された。今回のテーマは、文楽の「曾根崎心中」の上演台本について。現在、文楽公演で上演される「曾根崎心中」の台本は1955年に復活上演された時のもので、現在の文楽の様式に従って、近松の原文を大幅に書き換え新たに作曲されたものであるが、20年前(1990年12月)に2日間だけ、ほぼ原作通りの台本により三人遣いの人形で実験的に上演されたことがあった(池袋・東京芸術劇場。構成・演出 近藤瑞男、作曲 鶴澤清治、豊竹呂大夫・鶴澤清治・吉田襄助らの出演)。研究会メンバーでその時の公演を見ているのは教員だけで、研究生や院生はその舞台を知る由もない。教員の記憶をもとに、あらためて当時のプログラムや台本、批評等を通して、その意義と課題を再検討した。

文楽研究チームは、「古典演劇の復元的研究」を最も大きなテーマとして掲げ、21世紀COE時代からまる7年、全71回の研究会を続けてきたが、事業推進担当者の内山美樹子教授の定年退職に伴い、今回をもってこの研究会もひとまず終了ということになった。4月以降は後任の児玉竜一教授のもと、「芸能の音声・映像資料についての研究会」がスタートすると聞く。その成果に大いに期待したい。

(研究協力者 桜井弘)

■芸能の音声・映像資料についての研究会

第一回2010年4月15日(木) 19:00~21:00

戸山キャンパス33-2号館 演劇映像第2専修室(215号室)

- ・演劇映像第2専修室内にあるレコード整理の必要性の確認。及び具体的な整理・保管方法の検討。
- ・「心中天網島」大和屋の段(八世竹本綱大夫・十世竹沢弥七)の検討。

第二回2010年5月20日(木) 19:00~21:00

戸山キャンパス33-2号館 演劇映像第2専修室(215号室)

- ・キングレコード「八世竹本綱大夫大全集」の内、「嬢景清八島日記」日向島の段(八世竹本綱大夫・十世竹沢弥七)における詞章カットの問題について。
- ・文楽と歌舞伎におけるその他の「日向島」の検討。

日本演劇研究コースでは、2010年度から事業推進担当者となった児玉竜一教授が4月より「芸能の音声・映像資料についての研究会」を開始した。この研究会は、前任の内山美樹子教授の推進事業を一部継承しつつ新担当者児玉竜一教授の専門領域を加えた形となっており、今年度は早稲田大学文学部演劇映像専修室所蔵の武智鉄二旧蔵SPレコードコレクションの整理を中心として、その過程で、音声資料をめぐる知見を深め、共有することを目的としている。4・5月の研究会では、音声資料の専門家である人形浄瑠璃文楽チーム以来、GCOEに参加されている飯島満氏を今年度も引き続き客員講師として迎え、貴重な音声・映像資料の鑑賞と検討を行った。今後とも定期的に研究会を開催していく予定である。

(研究助手 原田真澄)

芸術文化環境研究コース:

今春、芸術文化環境研究コースでは舞台芸術環境から文化外交に至るまで幅広いテーマを扱う研究会を実施した。

■フォーラム 舞台芸術環境の未来を考える

日時: 2010年5月7日(金) 18:00~21:00

場所: 早稲田キャンパス27号館地下2階小野記念講堂

講師: 平田オリザ(演出家・劇作家、大阪大学教授、内閣官房参与)

聞き手: 伊藤裕夫(富山大学教授、日本文化政策学会副会長、GCOE客員講師)

松井憲太郎(富士見市民文化会館キラリふじみ館長、アジア演劇創造研究センター代表、GCOE客員講師)

司会: 藤井慎太郎(事業推進担当者、早稲田大学文学学術院教授)

現在日本の舞台芸術を考える上で最も重要なテーマである「劇場法(仮称)」を巡るフォーラム。昨秋の政権交代以降、内閣官房参与として劇場法制定の推進、及び劇場法の成立を契機とした日本における公的文化助成のあり方についての議論をリードしてきた平田オリザ氏に基調講演を頂き、当コース客員講師、来場者の方を交えたディスカッションがなされた。詳細は、1頁の特集記事①を参照ください。

■メキシコの路上演劇 ギジェルモ・ディアス氏を迎えて

日時: 5月11日(火) 18:30~20:30

場所: 早稲田キャンパス26号館302会議室

講師: ギジェルモ・ディアス氏(俳優・演出家)

通訳: 吉田理加(スペイン語会議通訳者)

メキシコで長年に渡って、貧困や暴力といった社会的弱者が抱える問題への関心を喚起するための路上演劇プログラムを運営してきた、ギジェルモ・ディアス氏を招いた講演会。路上演劇が歴史的には民俗芸能のエッセンスを継承したメキシコ独自の大衆芸能であること、そして路上演劇が観衆や社会へ



5月11日 ギジェルモ・ディアス氏の講演より

と訴える芸術としての力強さを、映像を交えながら説得的に紹介された。また、講演会の最後には即興で演劇ワークショップを実施し、参加者それぞれがその説得力を体感する機会をもつことができた。

■TPAM(東京芸術見本市)を考える

舞台芸術環境における見本市の役割と今後

日時: 5月17日(月) 18:00~21:00

場所: 早稲田キャンパス26号館302会議室

講師: 丸岡ひろみ(TPAM事務局長)

小沢康夫(日本パフォーマンス／アート研究所代表)

久保田夏実(国際舞台芸術交流センター)

今年で14年の歴史を持つTPAM(東京芸術見本市)をめぐる研究会。TPAM事務局長の丸岡氏からは、TPAMの歴史的経緯に参加団体数や予算規模といった統計データをもとに分析的に語って頂いた。また、小沢氏からは、見本市の重要なコンテンツである「ショーケース」の企画の過程やその背後にあった狙いを豊富な映像資料をもとに紹介頂いた。参加者からも活発に意見が出され、会場全体にTPAMの今後のあり方を問う雰囲気共有されていた。

■文化外交再考 歴史的な形成過程と現在における課題 第1回 フランスの文化外交政策

日時: 5月24日(月) 18:00~21:00

場所: 早稲田キャンパス26号館302会議室

講師: アレクシー・ラメック(フランス大使館文化参事官)

通訳: 福崎裕子(上智大学外国語学部教授)

今年度、芸術文化環境研究コースの新たなテーマとして掲げた文化外交再考。その最初のゲストとして、フランス大使館文化参事官アレクシー・ラメック氏を招いてフランスの文化外交に関する講演会を開催した。20世紀に入ってからフランスの文化外交の流れ、及び現在改編が進むフランスの在外文化施設の制度改革についてのお話を伺うことができた。参加者も文化外交の現場に関わる専門家が、熱気に満ちた講演会となった。

(研究助手 光岡寿郎)

東洋演劇研究コース:

活 動 報 告

東洋演劇研究コースでは、2010年度第一回共同ゼミ、並びに2010年3月と5月に中国芸術研究院から、それぞれ曲芸研究所所長呉文科氏及び元戯曲研究所研究員の章詒和氏を招聘して開催した特別講義及び講演会について報告する。

■第一回共同ゼミ

GCOE研究生の研究発表及び研究協力者の調査報告が行われた。

日時：2010年4月24日(土) 15:00～17:00

会場：早稲田キャンパス6号館318教室

発表者：岩田和子(GCOE研究生・早大院生)

「清末民初説唱本の流通と地域性
——湖南唱本を中心に」

清水拓野(GCOE研究協力者・神戸女学院大非常勤)

「博物館建設と展示にみる演劇文化の再構築過程
——西安地方・秦腔の事例から」

東洋演劇研究コースは今年度もGCOE研究生を中心に博士論文の構想、進行状況及び研究調査結果を報告する場を提供し、共同ゼミを開催する。まず第一回では、上海留学から戻ってきた岩田が留学中に調査した唱本の状況と博士論文の構想を発表した。また、研究協力者の清水氏は中国西安の秦腔について現地調査の報告を行った。

■特別講義

日時：2010年3月2日(火) 16:00～18:00

会場：早稲田キャンパス6号館318教室(レクチャールーム)

講師：呉文科(中国芸術研究院曲芸研究所所長・中国曲芸家协会副主席)

「中国における曲芸研究—歴史と現状」

中国の語り物芸能(曲芸)の研究を推し進めてリードしてきた

呉文科氏によって、中国における「曲芸」の定義と分類、1949年以前及び現在に至る研究状況について講義された。そして、講師自身が中心メンバーとして関わっていた『中国曲芸志』の編纂・刊行について語って、その研究史的意義と課題を現在所属の中国芸術院曲芸研究所の研究活動と結びついて中国の曲芸研究状況を明白に紹介した。研究者にとって中国の曲芸研究を全般に知る良い機会であった。

■特別講演会(一般公開、逐次日本語通訳あり)

日時：2010年5月29日(土) 15:00～17:30

会場：早稲田キャンパス14号館102教室

講師：章詒和(元中国芸術院戯曲研究所研究員・作家)

「梅蘭芳及びその他—現代における中国伝統演劇の運命」

通訳者：波多野真矢(GCOE研究生・中央大院)

映像：梅蘭芳一行1956年来日訪問時の関係映像(解説者：波多野真矢)

座談会：岡崎由美氏(早大教授・GCOE東洋演劇研究コース事業推進担当者)

児玉竜一氏(早大教授・GCOE日本演劇研究コース事業推進担当者)

「現代における日中の伝統演劇」

数奇な生い立ちを持ち時代の生き証人である講師は、京劇を代表する名優梅蘭芳の出身、境遇、芸術から語り、近代中国における伝統戯曲の発展状況、政策の影響などを講演した。1時間半の明快かつ濃厚な講演の後は引き続き映像解説及び座談会も開かれ、多くの研究関係者も含めて200人以上の聴衆にとって近代における中国の伝統演劇について考え直す良い機会となった。

(研究助手 李宛儒)

舞踊研究コース:

活 動 報 告

■第1回舞踊研究コース研究会

第1回舞踊研究コース研究会は、博士論文執筆を目指すGCOE研究生の研究発表及び研究指導を主たる目的として二人のGCOE研究生の発表が行われ、活発な議論が交わされた。博士論文の在り方や研究方法、テーマ設定の仕方といった基本的な事柄から、個別の研究に対するアドバイスや意見まで幅広い事が議論され、発表者のみならず聴講した研究生にとっても得るところの大きい会となった。研究指導は事業推進担当者片岡康子(早稲田大学客員教授)、客員講師石井達朗(慶応義塾大学名誉教授・鈴木晶(法政大学教授)、研究協力者吉川周平(京都市立芸術大学名誉教授)。

日時：2010年5月14日(金) 14:45～17:00

場所：戸山キャンパス31号館306教室

研究発表者：北原まり子(GCOE研究生)

タイトル：バレエ《春の祭典》における供儀の表象

研究発表者：竹田恵子(GCOE研究生)

タイトル：ダムタイプによるパフォーマンス作品《S/N》(1994)におけるアプロプリエーション—米国グラン・フェリーによる作品群との比較から

■バレエ研究プロジェクト第1回研究会 (通称：バレエ研究会)

バレエ研究会第1回研究会は映像研究コースとの合同で、「バレエ—初期映画史再考のためのもう一つの挑戦」と題した講演が小松弘氏によって行われた。初期映画史におけるダンサー／ダンサー的登場人物の意義を、映画というメディアの特性と当時の観客の受容、また実際の映像の紹介などから多角的に明らかにするとともに、映像を定着するフィルムの数奇な来歴とそれを



めぐる映画／映像研究者との出会いを語ること、初期映画史研究のダイナミズムを聴衆に伝えた。また、映画スター誕生以前の初期映画におけるダンサーの存在を、スター的存在の映画への輸入であることを示唆しながら、あまり見ることができないアンナ・パヴロワが踊っている映像、昨年発見されたタマラ・カルサヴィナが踊っている映像も紹介された。最後には鈴木晶氏からも補足説明がなされ、舞踊研究と映像研究の共同による新たな研究の可能性が垣間見られた会となった。

日時：2010年6月5日(土) 15:00～17:00

場所：早稲田キャンパス6号館318教室(レクチャールーム)

講師：小松弘(GCOE映像コース事業推進担当者)

タイトル：「バレエ—初期映画史再考のためのもう一つの挑戦」

(研究助手 渡沼玲史)

映像研究コース：

映像コース（映画史）では、昨年度に引き続き、研究資料としての映像資料の充実を図るべく、フランスの映画アーカイヴ、ロブスター・フィルムと共同で、フランスで近年発見された映画フィルムの復元作業を行った。実際に作業を委託したのは、可燃性映画フィルム復元にかけては世界のトップ・レベルにあるオランダのハーゲ・フィルムで、本年度は以下3本のフランス映画を復元した。

Soldado del antiguo regimen, Chico como mediadore, Le petit malade

全て、フランスのゴーモン社作品であるが、スペイン語タイトルになっているものは、スペインもしくは南米向けに輸出されたプリントであったからだろう。2番目の作品は<ベベ>シリーズの、おそらく *Bébé persecute sa bonne* であろうが、これに関しては詳細な調査

をする必要がある。3本とも同じ時期のコレクションの一部分を構成しており、全て1911年の作品であろうと思われる。これについても、さらなる調査が必要とされよう。

1910年代の映画研究プロジェクトとして、とりわけ映写の困難な9.5ミリフィルム、28ミリフィルム等のデジタル復元も東京の専門ラボによって行われ、その幾つかがすでに完成された。これらは、GCOE研究生の教材として使われ、研究発表会という形で、今年度中に集会を持つことになっている。

中国プロジェクトは、初期の中国映画史解明のためにこれまでも上海図書館を始めとして幾つかの場所で行って来た。本年度はこれまでの成果を網羅的に発表するために、国際研究集会を開く予定である。とりわけ香港在住のアメリカ人で初期中国映画

西洋演劇研究コース：

活 動 報 告

■ベケット・ゼミ（岡室美奈子）

6月3日から6日まで、ベケット・カフェ第三弾として『プレイ』（Play）の上演をミュージアム東京にて行なった。これまで安堂信也・高橋康也訳『芝居』として親しまれてきた作品だが、今回は岡室美奈子＋GCOEベケット・ゼミによる翻訳ワークショップを経て、新訳での上演となった。上演後に設けられたアフタートークにおいては、劇作家の佐藤信氏、批評家の佐々木敦氏、数学者の小島定吉氏（東京工業大学GCOE「計算世界観の深化と展開」サブリダー）といったジャンルを横断したゲストによって、多彩な切り口からの討議が行なわれた。

■ポストコロニアル演劇研究会（澤田敬司）

日時：2010年6月9日（水） 18:00～19:30

題目：「映画と国民に関する一考察」

場所：早稲田大学国際会議場4階共同研究室7

発表者：須藤遙子（GCOE研究生、横浜市立大学大学院博士後期課程）

発表者の須藤氏によって、映画における国民概念の形成あるいは解体がいかになされるか、映画というアリーナに働く「ナショナルリズム」をどのように考えるべきかというテーマが据えられた。そして、ナショナルなメッセージが商品として並ぶからこそ威力を発揮するという、消費主義を徹底した現代ならではのイデオロギーが作用するメカニズムについての指摘がなされ、発表後に設けられた質疑応答では、活発な議論が交わされた。

日時：2010年6月15日（火） 16:30～18:30

場所：早稲田キャンパス26号館地下多目的講義室

ポストコロニアル演劇研究会において研究を進めている「日本の翻訳劇における身体表象」の一環として、劇団民藝の田口精一氏に、日本の新劇におけるメーキャップの歴史と実践について、インタビューと実演をお願いした。

■フランス語圏舞台芸術研究プロジェクト（藤井慎太郎）

18世紀フランス演劇の専門家でパリ第四（ソルボンヌ）大学教授のピエール・フランツ教授を招聘する準備を進めている。それと並行して、フランス語の基本（発音・文法）の習得を目的とし、ミシェル・ヴィナヴェールの戯曲 *Dissident, il va sans dire* を読む研究会を開催している。これまでに行われた研究会は以下の通りである。

日時：2010年4月19日、5月10日、5月31日（月） 13:00～14:30

場所：戸山キャンパス33号館第2会議室

■オペラ／音楽劇の総合的研究（丸本隆）

オペラ研究会では、月に1～2回の研究会を中心に活動を行っている。2010年度に入ってからこれまでに行われた研究会は以下の通りである。

日時：2010年4月27日（火） 18:15～20:45

題目：ウィーンオペラ事情の最前線

——2008年9月から2010年3月までの上演の総括——

場所：早稲田大学国際会議場共同研究室7

発表者：佐藤英（GCOE研究生）

発表者の鑑賞体験に基づき、ウィーン国立歌劇場、フォルクスオーパー、アンデアウィーン劇場、ウィーン室内歌劇場で上演されたオペラ、オペレッタ作品の傾向が分析された。

日時：2010年5月25日（火） 18:15～20:45

題目：大正期浅草とイタリア・オペラ

——東京オペラ座「椿姫」上演を中心に——

場所：早稲田キャンパス8号館405教室

発表者：中野正昭（GCOE研究生）

浅草オペラにおける主なイタリア・オペラについて、演目、上演形態、劇場の規制、演者の技能、観客の趣向、盛り場としての興行様態などの観点から考察がなされた。

日時：2010年6月8日（火） 18:15～20:45

題目：19世紀イタリア・オペラのソリタ・フォルマ（定型）と作劇法

場所：早稲田キャンパス8号館405教室

発表者：森田学（国立音楽大学大学院講師）

オペラ作品や作曲家の作劇法を探る上で大きな手がかりの一つとなりうる「ソリタ・フォルマ（定型）」について、その形式と作劇法との関係が具体例とともに明らかにされた。

■17世紀フランス演劇研究会（オディール・デュスッド）

古典劇をパスカルの側から光を当てて再考する講演会が開催された。特に『パンセ』と『プロヴァンシアル』における演劇的な思考と手法をめぐって論が展開された。

日時：2010年6月5日（土） 15:00～17:00

題目：パスカルと演劇

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

講師：塩川徹也（東京大学名誉教授）

（研究助手 奥香織・菊地浩平）

活 動 報 告

資料収集家としてよく知られているポール・フォノロフ氏をお招きし、氏のコレクションの一端を紹介するという企画を立てている。我々はかつて氏の自宅を訪問し、その膨大な雑誌コレクションを見せていただいたが、今回は城西国際大学の佐藤秋成先生に再度フォノロフ氏の所に行ってもらい、国際研究集会に使用する予定の資料の写真撮影等を行ってもらうことにした。その成果は国際研究集会の折に発表することができよう。

映像コース（映画史）では、GCOEのほかのコースとの共同研究を積極的に行うことにより、映像学と演劇学の統合というGCOEの目標を実現すべく努力しているが、本年度は舞踊コースのバレエ研究会とのコラボレーションという形で、20世紀初頭のバレエと映画の相互関係に関する研究会を行った。カルサヴィナやバヴロフと

いった伝説的なバレリーナの登場する極めて珍しい映像の上映をこの場所で行うことが出来た。バレエ史の研究者たちにとっては有益な研究会になり得たのではないかと考えている。

今後のスケジュールの中では、日本演劇と映画史のコラボレーションとして、明治期の映画や演芸興行に関する研究会を持つことを企画している。これはごく最近演劇博物館が入手した、北海道の興行者九島興行の資料を用いて、まだあまりよく知られていない明治期の地方の映画・演芸に関する研究を開始しようという試みである。手書きの資料を読み解くことから始め、この研究がうまく軌道に乗ることが出来れば、資料集・論集として刊行することも考えている。
(事業推進担当者 小松弘)

新 刊 紹 介

『能と古注釈書』（神田裕子著 笠間書院 2010年3月）

本書は、神田裕子氏が昨年度学位を取得した学位論文をもとにしている。最新の研究成果をこうして単行本として読めることがまずはありがたい。内容は大きく三章にわかれ、能の作品に影響を与えた伊勢物語古注釈書をめぐる問題、謡本の最も古い解釈書『謡抄』をめぐる問題、謡への影響が指摘される能の先行芸能「宴曲（早歌）」をめぐる問題についてそれぞれ検証する。片桐洋一氏による序に記されるように、研究手法としては諸本の本文対校や書誌学による、徹底した実証研究である。中世の伊勢物語古注や、江戸初期の能楽資料の出版状況、明治時代の能楽研究の先駆者のひとり吉田東吾による宴曲研究など、守備とする範囲も広く、この研究からさらに派生するであろう多方面への展開が期待される。また、第一章では、これまで詳細に紹介されていない冷泉家流伊勢物語古注釈書系『十卷本伊勢物語注』の古筆切「伝二条為兼冷泉家流伊勢物語抄」の全文翻刻があり、第三章の付録として金春宗家蔵『宴曲集卷一』の全カラー写真と、翻刻が付されている。本書が、その研究内容だけではなく資料集としても、今後の能楽研究、中世文学研究に寄与するところは多いだろう。
(演劇博物館助手・GCOE 研究生 中尾薫)



『小説から演劇へ』（間瀬幸江著 早稲田大学出版部 2010年3月）

両大戦間期のフランス演劇の顔、ジャン・ジロドゥ（1882-1944）。1928年にデビュー、「文学的」で「気取った（プレッシャー）」文体と、メロドラマ的な作風とで一斉を風靡した。しかし彼は、劇作家である前に、外交官であり、小説家であった。シュルレアリスム運動に先駆けること10余年、独特の夢幻性に富む文体で文壇に登場して以来、彼は小説家としてすでに独自の地位を築いていたのである。劇作家ジロドゥの歩んだ道のりは、人のなかにある重層性、複数性を積極的に肯定することで生まれた小説の話者の矛盾をはらんだ語りを、メロドラマという複数の他人の発語によって構成される既存の形式のなかに移植するために繰り返された、試行錯誤の軌跡であった。両大戦間期という時代の波に翻弄されながら、演出家ルイ・ジュヴェを水先案内人に、16年にわたり演劇界に身を置き続けたジロドゥ。彼は演劇になにを求め、なにを賭けたのか。そしてなにを失い、なにをわたしたちに残したのか。

———演劇はわたしにとっては、自分の考えを表明する手段です。

しかし小説は、自分を知る手段なのです。（ジャン・ジロドゥ）

（研究協力者 間瀬幸江）



『演劇インタラクティブ 日本×ドイツ』（谷川道子・秋葉裕一編 早稲田大学出版部 2010年3月）

「日本から見たドイツ演劇史」研究会が立ち上げられたのは、グローバルCOEプログラム発足時の2007年であった。以後、研究会が重ねられ、その成果がこのたび『演劇インタラクティブ 日本×ドイツ』（早稲田大学出版部 2010年3月刊行）にまとまった。「インタラクティブ」が双方向性とか対話を意味するとすると、演劇を媒介にした日本とドイツの相互関係を考察する一書とでも言えようか。三つの段をなす全十場、その一場ごとの演し物が「演劇インタラクティブ」と「日本×ドイツ」の軸から逸れずに、働きかけあい、響きあい、劇的なインタラクティブを出現させようと試みる。各執筆者の世代や問題意識、専門領域の相違や落差、ずれは、読者のそれと相俟って、さらなるインタラクティブを現出させようとめざす。日本から見たドイツ演劇、ドイツから見た日本演劇、日本とドイツから見た世界演劇。見る者は見返され、主客が逆転し、視点そのものがより大きなパースペクティブのもとに視られるものとなる。執筆順に著者を紹介すると、以下のとおりである。中島裕昭、尾方一郎、本田雅也、丸本隆、谷川道子、市川明、萩原健、秋葉裕一、大塚直、四ツ谷亮子。
(拠点副リーダー 秋葉裕一)



『オックスフォード バレエ ダンス事典』

(デブラ・クレイン、ジュディス・マックレル著 鈴木晶監訳 平凡社 2010年5月)

本書は Debra Craine, Judith Mackrell, The Oxford Dictionary of Dance (2000) の翻訳である。総項目 2500、作品項目 6700。手前味噌ながら、日本で初めての本格的な舞踊事典であり、わが国の舞踊研究史上の画期的な出来事である。

原題は「ダンス事典」だが、邦訳では「バレエ ダンス事典」とした。「わが国ではバレエ愛好家が、他の舞踊(コンテンポラリーダンス、モダンダンス、日本舞踊など)の愛好家をすべて合わせたよりも多いから、ターゲットはバレエ愛好者だ」という出版社の意向にもよるが、内容的に、バレエに関する項目が圧倒的に多い。そもそもこの事典は、Horst Koegler, The Concise Oxford Dictionary of Ballet (1977, 82, 87) の後継として出版されたもので、バレエ事典がダンス事典として衣替えしたわけだが、中心がバレエであることには変わらない。

イギリスの本だから、われわれ翻訳者の知らない人名や作品名が膨大に含まれている。「削除はいいじゃない」というのが原著出版社との契約の一条件だったので、削るわけにはいかなかったわけだが、イギリスではどういう項目が必須と見なされているのか、がよくわるといふ利点はある。追加はかまわないといふので、日本関係項目を大幅に増やしたから、たとえば「エリアナ・パヴロバ」なんていう、海外の事典では絶対に入るはずがない人名も含まれている。

(法政大学教授・GCOE 客員次席研究員 鈴木晶)



鈴木文部科学副大臣 演劇博物館グローバルCOE拠点を視察



さる6月1日(火)に鈴木寛文部科学副大臣が早稲田大学に来校し、当グローバルCOE拠点「演劇・映像の国際的教育研究拠点」および理工学術院の「アンビエントSoC教育研究の国際拠点」の視察が行われた。

当拠点では、拠点リーダーの竹本幹夫教授による活動概要、研究内容の説明の後、当拠点の支援で活躍する若手研究者(研究助手、グローバルCOE研究生)との質疑が行われた。また、研究助手研究室、演劇博物館の貴重書庫など、研究の現場や演劇博物館の豊富な研究資源を見学された。

2010年度第一回グローバルCOE博士論文成果報告会

EVENT
CALENDAR

日時：2010年7月16日(金) 12:30～18:40 会場：早稲田キャンパス7号館1階
7月17日(土) 13:00～17:50 ファカルティラウンジ ミーティングルーム

プログラム(※入場無料・予約不要)

【2010年7月16日(金)】

- (1) 12:30～13:40
川島京子(舞踊研究)早稲田大学
「エリアナ・パヴロバによる日本へのバレエ移植」
- (2) 13:40～14:50
稲田奈緒美(舞踊研究)早稲田大学
「土方巽・暗黒舞踏研究—身体という制度への叛乱」
- (3) 15:00～16:10
志村三代子(映像研究)早稲田大学
「戦前の日本映画界における文学者・菊池寛の役割」
- (4) 16:10～17:20
高岡智子(芸術文化環境研究)神戸大学
「亡命ユダヤ人作曲家と映画音楽の成立史—初期ハリウッドから東ドイツへ—」
- (5) 17:30～18:40
佐藤良子(芸術文化環境研究)東京藝術大学
「文化施設における人材の育成方策についての研究—組織論的な面からみた音楽ホールの果たす諸機能を支える専門的な人材の育成」

【2010年7月17日(土)】

- (1) 13:00～14:10
佐藤 英(西洋演劇研究)早稲田大学
「ローベルト・シューマン オペラ『ゲノフェーファ』への道—詩的な音楽の実現へ向けて—」
- (2) 14:10～15:20
マートライ・ティタニラ(日本演劇研究)早稲田大学
「黒澤明の映画における伝統芸能」
- (3) 15:30～16:40
江口文恵(日本演劇研究)早稲田大学
「室町後期の能—作品世界と周辺の人々—」
- (4) 16:40～17:50
田草川みずき(日本演劇研究)早稲田大学
「浄瑠璃と謡文化—義太夫節成立前後の諸相」

編集後記

ニューズレター第8号をお届けいたします。4月1日付で私を含めて6人の助手が前助手と交代で新たに着任いたしました。これから多岐にわたる活動を伝えていきたいと思います。(研究助手 渡沼玲史)

News Letter 第8号

2010年7月15日

編集：渡沼玲史 奥香織 菊地浩平 大傍正規 原田真澄 光岡寿郎 李宛儒

発行者：早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」

拠点リーダー 竹本幹夫

早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

TEL: 03-5286-8110

URL: <http://www.waseda.jp/prj-gcoe-enpaku/index.html>